

マンガとアニメーションのオノマトペ

— 『3月のライオン』 について (1) —

水田 直美

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2018年10月1日 受理)

はじめに

マンガがアニメーション化されるときのおノマトペの表現変化について、2006年に『ヒカルの碁』を例に比較、考察した(水田(2007))。その結果、マンガにみられる臨時的・独創的擬音語は、アニメーションでは習慣的な音声表現や効果音に置き換えられ、擬態語もアニメーションでは動画表現や効果音、BGMの使用で表現されていることがわかった。『ヒカルの碁』に限らず、これは当時の一般的な日本のアニメーションで、同様の傾向であったといえよう。

このような傾向への疑問と挑戦として、宮崎駿が2006年に実験的アニメーションとして『やどさがし』を制作し、三鷹の森ジブリ美術館で上映を始めた。この作品は約12分でセリフがほとんどなく、すべての音声(音楽・効果音・セリフ)を人の声だけで表現している。また、ものの動きや様子・音を表す文字が現れ、珍しい表現方法を使った作品として、当時ニュースでも取り上げられた。

宮崎駿は2013年公開の『風立ちぬ』においても、セリフ以外の音声に人の声を使用している。宮崎駿作品だけではなくこの10年あまりの間、表現方法の模索と技術の発展により、アニメーションにおける音声表現は変化してきている。

そこで本稿では、原作マンガを比較的忠実にアニメーション化している作品といわれている『3月のライオン』を取り上げ、マンガがアニメーション化されるときのおノマトペの表現変化について、近年の傾向を分析する。

1. マンガ『3月のライオン』

羽海野チカの著作であるマンガ『3月のライオン』は、ヤングアニマルで2008年5号より連載され、現在も連載中の作品である(単行本は2018年9月時点で13巻まで発行)。

本作は、2011年第4回マンガ大賞、2011年第35回講談社漫画賞一般部門、2014年第18回手塚治虫文化賞マンガ大賞等、多くの賞を受賞している。

マンガの序盤のあらすじは以下のような内容である。

物語は、15歳で将棋のプロ棋士となった主人公の桐山零が、六月町で一人暮らしを始め、1年遅れで高校に編入したものの、高校で周囲に溶け込めず、将棋においても意欲や気力が持てない

でいるところから始まる。

零は幼いころに交通事故で家族を失い、父の友人である棋士、幸田に内弟子として引き取られた。しかし幸田の実子である香子、歩との軋轢もあり、経済的に独立し幸田家を出ることを目標に将棋に打ち込み、中学生プロ棋士になったという経緯がある。

ある日、先輩棋士に無理やり付き合わされて酔いつぶされ、倒れこんでいたところを川本あかりに介抱されたことがきっかけで、橋を渡った川向かいの三月町に住む川本家の3姉妹（あかりとその妹ひなた、モモ）と夕食を共にする等、交流を持つようになる。

2. アニメーション『3月のライオン』

アニメーション『3月のライオン』は、新房昭之監督、製作：「3月のライオン」アニメ製作委員会、アニメーション制作：シャフトで、2016年～2018年にNHK総合にて放映された。

第1シリーズは2016年10月8日～2017年3月18日（第1話～第22話）まで放送され、内容は原作マンガ第1巻～第5巻 p.7-p.56 とスピンオフ「ファイター」（第11巻 p.161-p.176）に相当する。

第2シリーズは、2017年10月14日～2018年3月31日（第23話～第44話）まで放送され、内容は原作マンガ第5巻 p.57～第9巻 p.7-p.88、p.121-p.124 と第10巻 Chapter.97 (p.35-p.48) に相当する。

アニメーション化にあたっての制作方針として、シリーズディレクター岡田堅二郎は、「『3月のライオン』のアニメ化のコンセプトには、「原作のセリフを一字一句逃さず、極力拾うかたちでやっていく」というものがあります。」（アニメーション『3月のライオン』第1巻 プロダクションノート 1 p.28）と述べている。

このような制作方針で作成されているため、話はほぼマンガに沿って話が進み、セリフも吹き出しに書かれていることばだけでなく、マンガのコマの中に書かれている吹き出し以外の手書きの文や文字も、セリフや感情的な音声表現として声優が演じることが多い。

原作で頻繁にみられる心情や説明等の文についても、モノログやナレーションとして、ほぼ原作通りにアニメーションに取り入れている。

川本家の飼い猫（通称ニャー）3匹の音声表現も、3姉妹を演じる声優がそれぞれ1匹ずつ担当し演じている。岡田は「ニャーが鳴き声ではなくセリフをしゃべるときは、なるべくアップで拾うようにしています。人間と一緒に映らないようにすることで、差別化をできたらな、と言いますか。」（アニメーション『3月のライオン』第1巻 プロダクションノート 1 p.29）と述べており、原作のマンガで鳴き声の書き文字と併せて、猫の感情や行動の擬人化として書かれている手書き文についても、鳴き声のみにする、または省くのではなく、最初から意図的にセリフとして採用し、作中の現実と混同が起らないよう表現方法が工夫されている。

上記のような制作意図も踏まえた上で、以下ではアニメーション『3月のライオン』第1話～

第3話のオノマトペを中心とした音声および音声に関わる表現と、それに対応するマンガ第1巻 p.113 までについて、川本家および川本家以外の場所で川本姉妹と関わる場面を取り上げ、比較する。

3. 川本家

3.1. 川本家内

3.1.1. マンガ p.66-67 および p.77・アニメーション第2話 Chapter.3、Chapter.4

主人公・零がはじめて川本家を訪れたのは、川本あかりが朦朧とした状態の零を川本家に連れ帰り、介抱して一晩泊めたときである。

マンガ第1巻 p.66-p.67 および p.77 で回想として描かれている。p.66-67 で路上に座り込んでいる零をあかりが見つけて声をかけ、近所に住んでいるとわかり連れ帰る場面では、マンガも絵とセリフのやりとりのみで、アニメーションの音声もセリフと動作に伴う効果音のみである。

翌朝ひどい二日酔いで目を覚ました零の様子を、マンガでは書き文字「ガンガン」「クラクラ」と吹き出しのセリフ「こ…ここは？」と表現しているが、アニメーションでも「ガンガン」「クラクラ」の書き文字と効果音を使用し、セリフは声優が発している。擬態語の使用は、二日酔いの起き抜けで、周囲や状況が把握できていない状態であることの表現と考えられる。

マンガ p.77 は夜中に川本家のトイレであかりに介抱されながら吐く場面で、吹き出し内の「ゴッゴホッ」「ゲッゲホ…」と書き文字「ゲホゴホッ」は、アニメーションではすべて声優が咳き込み吐く音声になっており、書き文字は使われていない。

3.1.2. マンガ p.24-35・アニメーション第1話 Chapter.1

マンガおよびアニメーションで、最初に川本家と3姉妹が登場する場面である。

あかり、ひなたからのメールや会話のやりとりから、零は度々川本家を訪れたことや、川本姉妹が零を心配していること、零の訪問を歓迎していることがわかる。零も川本姉妹に対して、遠慮しつつも安心した気持ちでいられる。あかりとあかりの祖父は、零の仕事やそれに付随する話がある程度知り、零の気持ちを察した上で受け入れている。

この日は川本姉妹から夕食に誘われていたものの、零は昼の対局時の気まずく重苦しい気持ちを引きずり、川本家を訪れる気持ちになれず、誘いを断ろうとする。しかし姉妹からのメール（とても楽しみにしている、買い物を頼まれる）で断れなくなり川本家を訪れる。

零は姉妹の前で普通に振る舞おうとするが、表情の端々に元気がなかったりニュースをきっかけに昼間の回想に沈み込んだりしており、マンガでオノマトペの書き文字は使われていない。

零の元気がない様子が端々に描かれているため、姉妹の言動がやや抑え気味に表現されており、マンガでの書き文字は控えめになっている。特にあかりは事情を知っているため、妹達には悟られないようにしつつ零を気遣った表現になっている。アニメーションでは更にこれらが強調され、

マンガで書かれているあかりの声の書き文字「キヤーッ」「う…うーん」は、アニメーションでは動作やセリフの声色で表現されている。

くわしい事情を知らない妹達（ひなた、モモ）は、零の様子を気にしつつも、日常と大きくは変わらない。妹達の言動についてのマンガでの書き文字は、アニメーションでは下記のような表現が使用されている。

セリフ 「きゃー」

音声 「はわーい（喜びの声）」

効果音 「ビュン」「ダダッ」

書き文字+効果音 「ピュー（急いで走り出す）」

しかし食事の後、心身とも疲れ切って寝入ってしまった零を気遣い、ひなたが世話をする場面では、マンガで「よっこらしょ」（上掛けを運んでくる）、「そーっ（眼鏡をそっとはずす）」という文字が書かれているのに対し、アニメーションではひなたの動作のみで表現されている。

川本家の猫3匹については、マンガでの書き文字はアニメーションでは下記のような表現が使用されている。

音声 「ニャーッ」「ミギャー」「ギニャー」「はぐはぐ…」

効果音 「カリカリ」「カッカッ」「カタカタカタ」

書き文字+音声 「もっちり（猫の肉付きがよい様子）」

元気で明るいあかりの妹達や猫についてのオノマトペがアニメーションでも使用されることで、川本家が温かくくつろげる家で良好な家族関係にあることが強調されている。

3.1.3. マンガ p.37-p.41・アニメーションアニメーション第1話 Chapter.2

上述の翌朝の場面である。時間の経過による状況の変化（通勤や通学前の慌ただしさ）で、朝の活発な慌ただしさとして、マンガでのひなたの言動は前夜以上にオノマトペが使用されている。これらのオノマトペは、アニメーションでは下記のように表現されている。

音声 「はわわー」

効果音 「ダダダダッ」「ばんっ」「カカカカカカ（納豆やご飯を急いで食べる音）」等

書き文字+音声 「ばばーん!!（零にソーセージを見せる様子）」

書き文字+効果音 「RRRR（ひなたの目覚まし時計の音）」「びゅん」「ビシッ」

零も川本家で眠ったことによる回復と、ひなたの元気な慌ただしさ圧倒されつつ、ひなたの言動を受ける形で、マンガでは複数の書き文字で使用されているが、それらはアニメーションでは下記のようになる。

音声 「えええ!？」

効果音 「カツカツカツ（箸で混ぜる音）」

書き文字+音声 「ええっ!？」「ガーンン（ショックを受ける様子）」

書き文字+効果音 「はっし!! (ソーセージをつかむ音)」

書き文字のみ 「シーン… (ひなたが出かけ静かになった様子)」

動作 (表情) のみ 「アセアセ」「デカッ」「ずっしり…」

マンガと比べ少なくなっているものの、アニメーションでも書き文字や音声、コミカルな動作によって、零とひなたの関係の距離の近さや、前夜と比較して零が回復していることが感じられる表現になっている。

3. 1. 4. マンガ p.78-p.84・アニメーションアニメーション第2話 Chapter.4

零がスーパーで3姉妹と出会い、姉妹に連れられ川本家を訪れる場面である。

姉妹が母と祖母のためにお盆の迎え火を焚き、その後姉妹の祖父も訪れ夕食を共にするが、思いつきもなく姉妹と祖父しんみりした様子で、零も死んだ家族のことを考えるが、はっきりと思いつきせず、喪失感を改めて自覚する。

マンガでは末っ子モモの声や猫が餌を食べる音、料理するの音などオノマトペの書き文字が使われているが、日常の川本家の様子から比べると非常に少ない。これらの書き文字はアニメーションでは使用されず、モモと猫の声、生活音の一環としての効果音で処理されており、普段の川本家の雰囲気とはかなり異なった様子になっている。零は帰り際に、あかりから「(送り盆のときも) 誰か居てくれた方が (気が紛れるから)」と頼まれる。

3. 1. 5. マンガ p.104-p.113・アニメーションアニメーション第3話 Chapter.6

対局を終えて遅い時間になったものの、あかりに頼まれた通り、零は送り盆をしている川本家を訪れる。姉妹達は食事を済ませており、零が食事した後、みんなで送り火を焚くが、つらくなったひなたは家族の前で泣きたくないため、一人川沿いに向かう。ひなたを心配した祖父は、零にひなたを追うよう頼み、零は川沿いで泣くひなたの側に寄り添う。

マンガでは零が訪れ食事をしている場面では少なめではあるものの書き文字がいくつかみられるが、アニメーションではお供えを狙う猫の様子「ギラギラ」とお供えの小ぶりさをしめす「ちんまり」のみが書き文字+音声で表現され、他の書き文字(「ニョロリ」「はふわーっ」「りー…りー…」「バシッ」「トンツッ…」)は動作や効果音になっている。

3. 2. 川本家外

川本家以外の場所で零が川本家の人々と会うのは、3姉妹の祖父の和菓子店で、あかりとひなたが手伝っている「三日月堂」(マンガ p.46-p.49・アニメーションアニメーション第1話 Chapter.2)、3姉妹の叔母の店で、あかりが週2日働いている「クラブ美咲」(マンガ p.63-p.68・アニメーションアニメーション第2話 Chapter.3)、川本家の近所のスーパーマーケット (マンガ p.74-p.76・アニメーションアニメーション第2話 Chapter.4) である。

「三日月堂」と「クラブ美咲」では、マンガではオノマトペの書き文字が使われているものの少なめで、和やかであっても仕事場と家庭の差が表現されていると考えられる。アニメーションでは書き文字は一切使われず、動作や効果音で表現され、更に差が明確化されている。

スーパーで3姉妹と零が会う場面では、マンガではオノマトペの書き文字多用されている(「キヤーッ」「ビクウッ」「ぎゅうっ」「じろじろ」「ガラガラ」「ガーン」「くる」「とんっ」「ポンッ」等)にも関わらず、アニメーションではすべて動作や効果音となっている。このようなマンガとの表現の差は、スーパーで騒ぐのは迷惑であり、書き文字やセリフの一部としてオノマトペを使うと、動きや音声を伴うアニメーションでは「場をわきまえず騒いでいる」ように視聴者に受け取られてしまうからだと考えられる。

4. まとめ

アニメーション『3月のライオン』冒頭部分の主人公・零と川本家の3姉妹が描かれている場面について、原作であるマンガ『3月のライオン』の該当部分のオノマトペを比較・分析したところ、原作であるマンガより減少するものの、擬音語だけでなく擬態語についても音声表現や動画上の書き文字として表現されていることが明らかになった。

また、アニメーションでのオノマトペの使用や画面上の書き文字は、親しさの変化、川本家内か川本家外か、場面の深刻さにより、マンガ以上に差をつけて表現されていることがわかった。

今後は川本姉妹（特にひなた）との関係が変化することでの表現の変化、および川本家の人々以外で、主人公と関わる人物との関係が描かれる場面を取り上げ、表現を比較・分析していきたい。

参考文献

- 田守育啓 2002 『<もっとしりたい!日本語>オノマトペ 擬音語・擬態語を楽しむ』 岩波書店
 竹内オサム・小山昌弘(編著) 2006 『アニメへの変容-原作とアニメとの微妙な関係-』 現代書館
 那須昭夫 2006 「あたらしいオノマトペの構造-『辞典に載っていない形』の文法性-」 『日本語学』第25巻第9号 37-45.
 水田直美 2007 「マンガとアニメーションのオノマトペ」 『倉敷芸術科学大学紀要』第12号 197-204.
 窪園晴夫 2017 『オノマトペの謎-ピカチュウからモフモフまで』 岩波書店
 羽海野チカ 2008.3 『3月のライオン』第1巻 白泉社
 羽海野チカ 2008.12 『3月のライオン』第2巻 白泉社
 羽海野チカ 2009.8 『3月のライオン』第3巻 白泉社
 羽海野チカ 2009.8 『3月のライオン』第4巻 白泉社
 羽海野チカ 2010.4 『3月のライオン』第5巻 白泉社
 羽海野チカ 2011.8 『3月のライオン』第6巻 白泉社
 羽海野チカ 2012.3 『3月のライオン』第7巻 白泉社
 羽海野チカ 2012.12 『3月のライオン』第8巻 白泉社
 羽海野チカ 2013.10 『3月のライオン』第9巻 白泉社
 羽海野チカ 2014.12 『3月のライオン』第10巻 白泉社
 羽海野チカ 2015.10 『3月のライオン』第11巻 白泉社
 羽海野チカ 2016.10 『3月のライオン』第12巻 白泉社
 羽海野チカ 2017.10 『3月のライオン』第13巻 白泉社

宮崎駿（監督・原作）2006 『やどさがし』（アニメーション）スタジオジブリ

宮崎駿（監督・原作）2013 『風立ちぬ』（アニメーション）スタジオジブリ

新房昭之（監督）羽海野チカ（原作）2017-2018 『3月のライオン』第1-8巻（アニメーション）「3月のライオン」アニメ政策委員会 アニプレックス

A Study of Expressions in Animation
from Onomatopoeic Expressions in Comic
— “March comes in like a lion”(1) —

Naomi MIZUTA

College of Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nisinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2018)

Many animations are made from original comics in Japan. In case of making animations, onomatopoeic expressions in comics change to other expressions.

This study examines expressions in the animation series of “March comes in like a lion” as contrasted with onomatopoeic expressions in the comic of “March comes in like a lion”.